

『ワールドカップは終わらない』（見本）

仙台の映らないテレビ

マッチ二十六 ブラジル対中国

六月八日、横浜から東北道を走って仙台に入った。

仙台はイタリア代表チームのキャンプ地になっている。だがいま、この地にイタリアはいない。クロアチアとの一戦のため茨城に行っている。午後六時からキックオフだ。

ホテルのフロントで、サッカーの試合を見ることのできる店はないかと聞く。いかにもホテル然としたフロントマンはいとも簡単に、さあてそれは知らないという。

仙台は今回のワールドカップの開催地のひとつで、しかも、優勝候補のひとつであるイタリア代表のキャンプ地であり、しかも、今日はそのイタリアの試合があるのだ。

三月の時点で、六月の試合日前後にJTB東日本営業部が押さえていた仙台のホテルの残室は百室未滿。明らかにワールドカップ効果が出ている。例によってその精度は疑わしいけれど、少し前の国土交通省の観客需要予測では、約一カ月の大会期間で延べ二十二万人が宮城県内に宿泊すると見積もっていた。

市民がイタリア代表を応援する「フォルツァ・アズーリ・クラブ」は、「ファッシオンビル141」や「アエル」、「サンモール一番町商店街」などにチーム紹介や会員登録を受け付けるオフィシャルセンターを開設している。

イタリア貿易振興会などのイタリア代表チームスポンサーは、仙台市内のプラザ「ワッセ」に千三百七十平方メートル規模の「カーサ・アズーリ」を開設している。

であるのに、ワールドカップを見に来る観光客が必要としているもっとも基本的な場所である「サッカーを観ながら飲食のできる店」の情報がない。また、試合を見ることのできる店や施設自体も少ないのだ。

むろん、僕は、仙台に『Cafe Street』というスポーツバーがあることをインターネットで調べ上げていた。少なくともその店へ行けば、そして中に入ることができれば、今晚午後六時からおこなわれる茨城スタジアムの「イタリア対クロアチア」をテレビ観戦できるはずだ。

しかし、人気カードのある日、スポーツカフェの混雑は尋常ではない。

前日の六月七日、横浜にいた僕は、試しに横浜で唯一のサッカーカフェ『てれつ亭』に出かけてみた。アルゼンチン対イングランドという、いわゆる因縁の対決試合があったからだ。もちろん自宅のスカイパーフェクトTVで、その試合を生中継で見ることできるのだけれど、とりあえず録画予約をセットして、僕はサッカー観戦のもう一つの王道であるスポーツカフェを楽しんでみようと思った。

もちろん、混雑は予想のうちであり、おそらくは入れないであろうと踏んでいた。サッカー

ーを観ることも重要だが、サッカーを楽しむ人たちのようすを見ることも、サッカーカフェの混雑度を調べることも、それぞれ大きな興味をそそる。日本で開催されているワールドカップ、そのどんな側面であつても、僕は自分の目で確かめてみたかつたのだ。観戦だけなら録画より生放送で観た方が断然面白い。でも、サッカーカフェのようすは試合時間にしか見ることができない。となれば、人気カードのある夜、店へ行つてみるしかない。

横浜JR関内駅からほど近いところに『てれっ亭』はある。店を見つけるのはそれほどむずかしくはなかつた。だが、階段を上がつた二階にある店は、試合開始三十分前にすでに満員。やはり予約がないと入ることができなかった。残念なような、やつぱりねと予想通りでちよつとうれいような、そんな気持ちで階段を下りる。すると階下の入口に立っている若いカップルがあつた。

「わたしたち、これから今夜めいっばい盛り下がっちゃうよ」

半分泣きそうな女の子の聲が聞こえた。

僕と同じように、『てれっ亭』で試合を見ようとやってきて入れなかつたのだ。

彼らがこれからどうするのか、後をつけて確かめたい欲望を抑えて、僕は店の近所をひとりで徘徊した。

「ワールドカップ放映中」

そんな張り紙や看板を出している店が何軒も見つかつた。カウンターだけのタコス屋にも、純和風の造りの居酒屋にも、そんな看板があつた。

よしよし、これでこそワールドカップだ。

いつのまにか僕は「ワールドカップのファン」になっていた。ワールドカップに夢中になっている人や、ワールドカップでふだんと違う暮らしをしている人、ふだんと違う商売をしている人を見かけるとうれしくなる、そんな身体になっていたのだ。

仙台は都会だ。古くからの文化があり、東北大学や東北学院大学を擁する若者の街でもある。横浜のようにスポーツバーが満員にならないはずはない。ましてや地上波での放送のない人気チーム・イタリアの試合は『Club SHANT』がすいているはずはない。

ホテルを出た僕は、めざすスポーツバーへ向かう途中、まずJR仙台駅に隣接したヨドバシカメラに立ち寄る。ぐるりと見回ったテレビ売り場でサッカー放送はなく、なんと柱にはご丁寧に「当店ではワールドカップは一切放映しません」と張り紙がしてある。なるほど、店内のテレビにワールドカップを映し出すものなら、店中が人で溢れて商売ができなくなってしまうにちがいない。

またもや「ひとつのワールドカップ風景」を見つけてその場を後にする。

めざす『Club SHANT』は仙台でも有数の歓楽街国分通りの雑居ビルにあった。

だがすでにエレベーターの入口脇には「Sorry, Sold out, Club SHANT」の張り紙がある。やっぱり。

残念だ。だが、予想通りだから落胆はなかった。むしろ、ワールドカップ人気を確認してうれしくなった。我が子がクラスで人気者だと聞かされた親のような気持ちとでもいえるべきだろうか。

ただ問題は、ホテルの自室に帰っても、今夜は試合を見ることができないことだ。ワールドカップでこれだけ人を呼んでおきながら、仙台のホテルはスカイパーフェクトTVを客室に供給しないのだ。ケーブル経由で有料アダルトビデオは放送しているというのに、ワールドカップをテレビで見せることに対して、まったくひどい対応ぶりなのである。

ふたたび通りに出ると、数人の外国人のグループが立ち止まって話をしていた。まちがいなく彼らも試合の映るテレビを探している。

そこへ痩せぎすの白人が小走りに現れ、立ち止まっているグループに話しかけた。

「どうやら彼らは同じ仲間ではなさそうだ。」

スペイン語だったらお手上げだが、幸いなことに会話は英語だ。

「このあたりでワールドカップを見られる店を知らないか」

「自分たちもそれを探しているんだけどね」

「やっぱりね。ホテルでも町でもワールドカップを見られないなんて、なんて国なんだ。日本は開催国だっていうのに」

「この先のビルの八階で、ブラジル対中国は見られるらしいんだが……」

つまり地上波なら受信できる店なんだろう。

「僕が観たいのはイタリアなんだ」

「おれたちもそうさ」

会話はそこで行き詰まっていた。ワールドカップを見るために日本に来た外国人たちは、本当に必死で試合を見ることのできる場所を探していた。当然のことだ。

時刻は午後六時半、クロチア対イタリアは、すでに前半三十分が過ぎようとしている。立ち聞きしていた僕にとってはいいニュースだった。

この先の八階でブラジル対中国なら見る事ができる。

それで手を打とうじゃないか。

店はすぐに見つかった。雑居ビルの入口の看板が並んだところ、店の名前の上に汚い段ボールが貼り付けてあり、マジックで「Monocoop」とだけ書いてあった。

他のテナントはキャバクラやかなり怪しい名前のクラブばかりだ。

エレベーターの最上階、八階。

ふつうなら絶対に足を踏み入れたくないところだ。いかかわしき満点だし、火事になったら絶対に逃げられず薫製になって死んでしまうようなビルなのだから。

だが、なにしろワールドカップである。いまとなつては僕にとつても人生における優先度はかなり高い。

清水の舞台から飛び降りよう。扉を押したそのアフリカンバーは、よくあるエスニックなインテリアで、髭面の善良そうな男が笑顔で僕を迎えた。なんだこれなら大丈夫。

すいていた。ウナギの寝床のような店。

壁に埋め込まれた百インチのプラズマディスプレイには無音でなにやら映画が流れている。

奥にはドイツ人のような顔をした男性二人。いやアメリカ人もしれない。

カウンターには年齢不詳の西洋ヒッピー野郎がふたり。いや片方の長髪は女性なのかもしれないが、話し声を聞いてもなおよくわからない。他には日本人の女性グループが二組。僕

はようやく座ってビールを飲むことのできる場所にたどりついたことをまず喜び、なんとかこの大画面でブラジルの試合を見ることができると安堵した。

テーブルはまだ半分も埋まっていない。

が、店の主人と従業員のふたりはやけに忙しそうだ。どことなくキッチンと注文取りの手順が悪いところからすれば、これでもふだんより混んでいるらしい。

試合までおよそ一時間、六人の外国人グループが奥の席に着いた。

冷えたビールがなくなつたというカウンターの会話。

ふだんはよっぽど流行らない店らしく、ほぼ満席になつただけで店は軽いパニックを起こしていた。

外国人のテーブルに注文を届けた従業員がなにやらやりとりをしている。どうも注文と品物が違うらしい。フライドポテトをつまみながら、それとなくようすをうかがうけれど、どうも事態が好転するようすはない。

「どうやら「ワールドカップ通訳ボランティア」の出番らしい。」

「どうかしました?」

「僕は何も頼んでいないのにこれがきちやつたんだけど」

ヒスパニック系の顔つきだが訛りのないアメリカ英語で男が答える。

「たのんでいないといってますけど」

カウンターの店の店長と思しき髭の男に伝えると、「ああそつですか」と納得したような返事だ。ワールドカップのおかげで予想外に客の入りがあつて捌ききれないせいなのか、もと

もと面倒なことが嫌いなのか、淡泊なものだ。

ちよつとお節介かなと思いつながら僕はテーブルの男にいう。

「日本ではこういう店に入ったら少なくともなにかひとつは注文しなければいけないんだ。それが日本の商習慣つてやつでね。別に僕は店の人間じゃあないんだけど」

せつかく日本に来たのだから日本の文化を知ってもらつたほうがいい。

「あなたがただの客だつてことはもちろんわかっている。じゃあ、僕は何を頼んだらいいんだらう」

メニューを拡げて説明する。

結局、彼はバーボンのコーラ割りを注文した。

カウンターの中ではなにやら若い店員がごそごそと作業をはじめていた。

いやな予感。

どこからか埃をかぶつたような室内アンテナを出してきていじくっている。

画面が切り替わる。きれいな画で映っていたアメリカ映画が、ゴーストだらけのテレビコマーシャルに替わつた。彼が手にしている情けないアンテナでサッカー中継を受信するつもりらしい。

こりゃあ、かなりのことになるな。

カタツムリの角のようなアンテナの開き加減を変えたり向きを変えたり、店員の努力はつづいていた。けれど、それはまるで泥だらけの汚い雑巾で窓ガラスを拭いているようなもので、何かがよくなると別の何かが悪くなる。窓際にアンテナを出すには線の長さが足りない。

シジミしかとれない浜でハマグリを探しても見つからない。

どうやら快適な環境で試合を見ることは絶望的なようだ。

となると、これから二時間ほどのあいだにこの店でいっただい何が起こるかということに、なかば僕の興味は遷っていた。サッカーの試合は横浜に帰ってからスカパーの再放送で見ることにして、ここでは事と次第を観察する方が楽しそうだ。

なにはともあれ、「この店なりのベスト」だろうと思われる砂をまいたような映像で、マッチ二十六、ブラジル対中国の試合は始まった。

ゴーストとノイズ。

吹雪の中で少し色の違う二人の選手がふたつのボールを追いかけるような映像だったとはいえ、余計なことをしなければよかったのだ。

誠実な店員は手があくと試合中もさかんにアンテナをいじっていた。

「World Cup」と書いたボール紙でこれだけの客が集まっているのだから、試合観戦を目当てに来た客に、なんとか少しでもいい映像で見てもらいたいと思っただろう。

だが彼の努力こそが最悪の事態を招いた。

こともあるうちにビデオチューナーの裏側でアンテナ線が外れてしまったのだ。

なんとか音声だけは聞こえていた。だが、画はまったく映らない。たちまち店内は騒然となる…… ようなことはなく、客たちは小さなため息をついてじっと待った。店員のやり方がいかにもぎこちなく素人丸出しで、大声を出せば彼をパニックに陥れることがあまりにも明らかだった。掠れるような画面を見ながら、そもそもだれもがこの事態を半ば予想していた。

厨房のいちばん隅っこに積み上がったAV装置。ふだんはスイッチと音量調整ぐらいしか省みられていない、少々埃をかぶった機械の裏で、無情にもサナダムシかフェットチーネのような昔ながらのファイダー線が外れてしまったのだ。

店員は引き寄せた椅子の上に靴を脱いで上がり、両手で機械を抱えて引き出し、できた隙間から手を入れて直そうとしている。

それを固唾を飲んで……見ている僕のような客もあれば、ただふつうにビールを飲んでい
る客もある。

前半十五分、ブラジルのフリーキック。
声だけが聞こえる。

蹴るのはどうやらロベルト・カルロス。

「ゴール！ ブラジル、先制点！」

あゝあ、ついに見えない間に点が入っちゃったよ。

前半三十二分、リバウドが左足で二点目を入れた……らしい。

テレビはまだ映らない。

店員の首筋の汗。背中の悲壮感。彼がその背中に感じているであろう針のような視線。

諦めた客は食べ物や飲み物を注文しはじめ。諦めきれない客は、ぬるくなったピアジヨ

ツキを前に煙草に火をつける

やつと、スクリーンに粉っぽい映像がふたたび映し出された。

自然に湧き上がる拍手と歓声。

うつむきながら振り向いた店員の顔がゆっくりと柔らかくなる。

まるで、選手とゴール裏のサポーターのように、店員と客が喜びを共有していた。

だが、まもなく前半は終了。

すでにブラジルが三点を挙げていた。

これもワールドカップだ。

後にスター選手たちがつぶやいたのと同じ言葉を、駅の反対側にあるホテルをめざす僕もつぶやいていた。

すべては貴重な体験。

ただのさえないバーで、ほとんどすべての客と店員が心をひとつにして祈り、たった一本の線がつながるのを待ちこがれる、なんてことは、おいそれとあるもんじゃありません。

ブラジル対中国という試合自体が番狂わせもなく点差の開いた試合だったということもあるかもしれないが、僕は今夜の事件を十分に楽しんだという気持ちになっていた。

世界の一流選手がぶつかりあう試合の、すべての選手の一挙手一投足がそれぞれ自体事件であるからこそ、ワールドカップは他のどのサッカー試合とも似ていない。けれど、試合も事件なら、ワールドカップがいま行われているということそのものだって事件であり、ユニフォームで新幹線から降りてくるエクアドル人を見ることが、映らないテレビの画面の前でビールを飲むことも、全部、ワールドカップなのだ。

だからこそワールドカップはただのサッカーの世界選手権ではない。

駅の前では緑一色のメキシコ人が集まって氣勢を上げていた。その脇を数で劣勢のエクアドル人が通り過ぎる。それを見つけたメキシコ人が叫ぶ。

「エックアドール！」

今度は黄色いユニフォームのエクアドル人が言葉を返す。

「メヒコ！」

そうやってエールの交換はわずか五秒で終わるけれど、駅前の熱気はいつまでもつづくのだ。

ブラジル対中国の試合そのものよりも、たった今、目にしたことに感動しながら、僕は仙台駅構内を東口へ向かっていた。

繁華街の喧噪から離れると、しだいに蛍光灯のさめざめとした光があたりを照らすようになる。明るいけれどどこか寂しい旅先の夜の風景だ。

その白い光の中に座り込んでいる小太りの外国人がいた。

僕はその脇を通り過ぎ、すぐまた引き返した。

「何か助けがいる？」

英語で聞いてみる。見れば大きな荷物がコインロッカーに立てかけてある。

「いま荷物から必要なものを出したところなんだが、こいつが五百円で、小銭がないんだ」

こんども思いがけずほとんど詛りのない英語で答が返ってきた。ロッカーの説明書きによれば、百円玉が五個いるらしい。

「これならあるんだけどね」

そういいながら男は手に握った五百円玉を見せる。

「なるほど百円玉がいるってわけだ。よかった。それなら簡単だ」

僕はポケットの中で膨れあがって困っていた小銭入れから百円玉を五つ選んで渡し、代わりに五百円玉を受け取った。

「ところでどこから？」

そう聞きながら彼の被っている帽子を見て、僕はそこに書かれた文字を読み上げる。

「メキシコ」

彼と僕の声が重なった。

「明日、僕もメキシコとエクアドルの試合を見に行くんだ」

「おお、そうかそうか。今日イタリアが負けたから、明日の試合に勝てば一次リーグ突破がぐつと近づくんのだ」

思わぬところで見損ねたイタリアの試合の結果を知る。

「重要な試合ってわけだね」

当然メキシコは勝つさ、そんな意味を込めるように男は親指を立てて笑顔をつくった。

時刻は午後十一時を回っている。

この時間にコインロッカーの荷物を入れ直しているということは、今晚、彼はホテルには泊まらないということだ。

「グッドラック」

夜が過ぎやすいといいけれど。

そんなつもりで言った僕の言葉を、彼はメキシコへの応援だと受け取ったかもしれない。